



自治体現場で思うこと

片山健也

私の二代前の町長逢坂誠二氏（現総務大臣政務官、衆議院議員）は、毎朝五時半過ぎに役場に登庁し、七時頃には、「町長室日記」というタイトルの所信や町政課題などを書いたメールを全職員に配信していた。東京にいても、海外にいても休むことなく続けられていた。私も部下として、一緒に仕事をしていたが、逢坂氏は、正月に二日間ほど休んでいたことを記憶しているが、任期中の一〇年間は、ほとんど休みなしの激務をこなしていた。日本が「高度成長」の頃に流行した「猛烈社員」なる言葉を仕事をしながら想起したものだ。

国の借金が七〇〇兆円を超え、そして、自治体の人口規模拡大が経済合理性に資すると信ずる当時の政権与党による「市町村合併」の強力な推進がなされた。自治体としては、「雑巾を絞るから、切り刻むしかないほどの経費節減」に、多くの自治体を取り組んでいた。

わが役場でも冬期間の庁舎の暖房は、執務時間外は切られ、多くの職員が登庁する八時頃入れられる設定にしている。朝早く登庁する町長も、凍てつく執務室で外套を羽織って二時間半も毎日机に向かっていたのだ。職員も夜や祝祭日の勤務は、かじかむ手をこすり

ながら仕事をしていた。少しでも暖房費用を節減しようと努力しているのだ。爪に火をともしようと頑張っている地方自治体の現実を、お金に苦勞したこのない国会議員や財務省の高級官僚の皆さんには、とても理解できることではないのかもしれない。

新自由主義による市場原理こそが、日本を再生すると信じている「小泉・竹中改革」によって、地方は政治も経済も大きく傷つき、急速に疲弊した。国の財政の厳しさを背景にした市町村合併は、住民の地域への愛着や誇りを奪い、そして、国力をも大きく減退させたといえるのではなからうか。

岡崎昌之教授（法政大学）は、「離島や半島での合併で、市町村役場庁舎のある中心市街地に多くの人々が移転し、海岸線に住む人の数が急速に減少した。海岸線にある農山漁村の人々は、そこに住んでいることで日本の国境線を守ってきたという側面がある。今後、一層進むであろう離島や半島などの無人化によって、日本の国境警備、国防の低下を危惧せざるを得ない」と講演



(二〇一〇年小さくても輝く自治体フォーラム in 酒々井) で述べられていた。「経済効率至上主義」は、結果として、日本の国益をも大きく損なう面を併せ持っていたのだと思う。

そして、今年の一月一日にNHKホールで開催された全国町村長大会で、大森彌東京大学名誉教授は、「ドイツの経済学者であるアーンスト・シューマツハの書いた『スモール・イズ・ビューティフル(人間中心の経済学)』という本をスピーチの中で紹介された。「シューマツハは、その著書の中で、△あらゆる社会的な災いの背後には、ただ一つの言葉が見える。それは巨大さだ▽と、大きすぎることが社会の問

題だと指摘している。小さな組織、小さな町のほうが、巨大なそれらよりも、いかに効率的で、愛に満ち、創造的で、安定していることか、と語っている。身の丈に合った規模が大切なのだ」と。今、日本に必要なものは、経済効率至上主義から脱却して、多様性を認め合う社会の豊かさと創造力を育む心の豊かさを守るとともに、「相互扶助」の理念を再確認することではないかと思う。

新年度の予算をめぐる新聞報道によると「財務省は、今日もなお自治体には無駄が多い」として、地方の財源である地方交付税をさらに削減しようとしているという。

政府と自治体の関係は、地方自治法の改正によって「中央と地方の対等・協力の政府間関係」となった。地域主権改革とは、自治体の自主財政権、自治立法権等を幅ひろく包含し、地方自治の自主自律を目指すものであったはずだ。地方固有の財源である地方交付税をその制度を熟知していない人々が、わずかの議論で「事業仕分けする」という的外れなことも含め、中央政府の

地方政府への不当介入はもうやめにしてもらいたいと切に願っている。

国が閣議決定をした「新しい公共」と日本の将来ビジョンの中に次のような記述がある。「日本では昔から、△稼ぎがあつて半人前、つとめを果たして半人前、両方合わせて一人前。つとめはひとさま、世間様のために一肌脱いで役に立つこと▽といった考えがあつた」と。戦後右肩上がりの経済成長の中で、自治体は公共「サービス」を加速度的に拡大し、その結果として、人々が担ってきた「相互扶助」や「地域力」を奪い取ってきたのだと思う。日本の社会は、元もと人々が助け合う社会であつたのだ。その地域の相互扶助の風土と人々の営為を、自治体が公共サービスの拡大の名のもとに奪ってきたのが戦後の日本の歩みではなからうか。自治体の首長は、今一度自治の原点に立ち返り、「自治を再構築する」そのときに来ているように思う今日この頃である。

△かたやま けんや・二七〇町長▽